

㊦ 嘉永版発句集初見

一年を売て親を養ふは孝行云んかたなし

○出代や汁の実なども蒔て置

㊦ 文政版発句集初見

㊦ 文政句帳(6・1)、前書なし。中七「迹の汁の実」。

○出代やいづくもおなじ梅の花

㊦ 七番日記(10・3)・志多良・稿本発句題叢・句稿消息・浅黄

空

㊦ 自筆句集、上五「出代りよ」。

出代の市にさらすや五十顔

㊦ 八番日記(2・1)・発句鈔追加

㊤ 句稿消息、上五「門の雪」(別案)。浅黄空・自筆句集、上五「門の雪」。

○門前や杖でつくりし雪解川

㊤ 文政版発句集初見

㊤ 八番日記(2・2)、中七「子ど」【も】の作る」。同(4・12)、「門先や童の作る雪の山」。

○三日月はそるぞ寒さは冴かへる

㊤ 七番日記(1・1)

㊤ 自筆句集、中七「そるぞ嵐【は】」。

藪入や三組一所に成田道

㊤ 俳諧千題集(寛政1)

㊤ 七番日記(14・1)・浅黄空・自筆句集、中七「一」に」。

○藪入や墓のまつ風うしろ吹

㊤ 七番日記(7・2、7・3 || 重出)・文政九・十句帳写(10)

○芽出しから人さす草はなかりけり

㊤ 八番日記(2・2)・自筆句集

はや淋し朝がほ蒔といふ畑

㊤ 株番

藪入のわざと暮や草の月

㊤ 享和句帳(3・12)・七番日記(12・12)・希杖本句集・近世発句類題集

句類題集

㊤ 享和句帳、中七「わざと暮れしや」。七番日記・希杖本句集・類題集、中七「わざと暮しや」。稿本発句題叢、中七以下「わざと暮れしや二日月」。

店開賀

○福の来る門や野山の朝笑ひ

㊤ 自筆句集

○かくれ家や猫にもいたふ二日灸

㊤ 自筆句集

㊤ 自筆句集、中七「猫にも祝ふ」。八番日記(2・2)、「かく【れ】家や梅にもすへる」。同(2・3)、「かくれ屋や猫にもすへる」。おらが春・文政二年二月李園あて書簡、中七「猫にもすへる」。

初午

○花の世を無官の狐鳴にけり

㊤ おらが春

㊤ 八番日記(2・3)、前書なし。上五「初午に」。

○齒も持たぬ口にくはへてつき穂哉

㊤ だん袋・自筆句集

夜に入ば直したくなるつきほかな

㊤ 文化句帳(5・2)・発句鈔追加

㊤ 稿本発句題叢・希杖本句集、上五「夜に入て」。

山焼の明りに下る夜舟の火

㊤ 座五「夜舟哉」の誤記か。七番日記(1・3)・自筆句集・だん袋、発句鈔追加、座五「夜舟哉」。

畑打や子が這歩行つくし原

㊤ 八番日記(2・1)

㊤ 中七「子が這歩く」。

畑打や田鶴啼わたる辺り迄

㊤ 句稿消息、中七「つかんでかすむ」。八番日記(4・2)、中七「見せくかすむ」。

霞日や夕山かげの飴の笛

㊦ 文化句帳(2・1)・稿本発句題叢・希杖本句集

㊧ 七番日記(12・12)、「寛政元ヨリ文化六迄」として、座五「^(飴)笛の飯」。発句鈔追加、中七「夕山かけて」。自筆句集、上五「霞けり」。

霞日やしんかんとして大座敷

㊨ 八番日記(2・2)・おらが春・発句鈔追加

横乗りの馬のつどくや夕霞

㊩ 八番日記(2・2)・発句鈔追加

㊪ 八番日記(2・3)・おらが春、座五「夕雲雀」。

霞けりにくい宿屋も迹の村

㊫ 八番日記(2・3)・自筆句集

㊬ 自筆句集、前書「旅」。浅黄空、座五「迹の駅」。

菜翁と遊ぶ

○此門の霞むたそくや墨田の鶴

㊭ 俳諧老が染飯(文化7)

還暦の賀

老松やまたあらためていく霞

㊮ 発句鈔追加

㊯ 発句鈔追加、前書「文政九年梅堂六十一の賀」。梅塵抄録本一茶連句集、前書「文政九年三月三日、梅堂老人の六十一を賀す」。中七以下「改めていくかすみ」(一茶・梅堂・梅塵三吟歌仙)。文政九・十句帳写(9)・希杖本句集、前書「年賀」。中七「改めて又」。

○誰それとされて霞むや門の原

㊰ 文政句帳(5・2)・浅黄空・自筆句集

○けふもく霞んで暮す小家かな

㊱ 句稿消息(重出)

㊲ 七番日記(12・2)、上五「菜も蒔て」。浅黄空、上五「菜も蒔て」。座五「山家哉」。自筆句集、上五「菜【も】蒔いて」。座五「山家哉」。

某母八十八歳賀

○門島や米の字なりの雪解水

㊳ 文政六年三月一日付素鏡あて書簡(一茶真蹟集所収)

㊴ 文政版発句集、前書「素鏡が母八十八才賀」。文政句帳(6・1)、前書「八十八」、「米の字にき^(と)残りけり門の雪」。

あさましやちよつとのがれに残る雪

㊵ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

鍋の尻ほしならべたる雪解かな

㊶ 八番日記(2・1)

○雪解や鷺が三疋立白に

㊷ 七番日記(14・1)・浅黄空・自筆句集

○世にあればむりに解すや門の雪

㊸ 文政版発句集初見

㊹ 七番日記(12・1)、上五「世に住ば」。浅黄空、上五・中七「世に住ばむりニとかすぞ」。自筆句集、上五「世に住で」。希杖本句集、上五・中七「世に住めばむりに消やすぞ」。

○庵の雪下手な消様したりけり

㊺ 七番日記(10・3)・志多良・句稿消息

是程の上鶯を田舎かな

㊦ 梅塵本八番日記(2)

○鶯のまてにまはるや組屋舗

㊦ 文政版発句集初見

㊦ 八番日記(3・1)、中七以下「まてに歩くや組やしき」。

袖下はみな鶯や小せき越

㊦ 俳諧千題集(寛政1)・稿本発句題叢

㊦ 希杖本句集、上五・中七「鶯と袖すりにけり」。

松室に遊ぶ

○鶯の馳走にはかぬ垣根かな

㊦ 文政句帳(7・5)・浅黄空・自筆句集

㊦ 文政句帳・浅黄空・自筆句集、前書なし。八番日記(2・2、2・3

||重出)・おらが春、中七「馳走に掃し」。

○黄鳥や泥あしぬぐふ梅の花

㊦ 七番日記(11・2、春||重出)

㊦ 浅黄空、「鶯の泥足拭くや」。

○鶯ののにしてなくや留守御殿

㊦ 文政九・十句帳写(9)・希杖本句集

㊦ 梅塵抄録「茶連句集、座五「留守屋敷」。

○鶯やよくあきらめた籠の声

㊦ 浅黄空・自筆句集・さびすなご(文政7)

㊦ 八番日記(4・10)、中七「あ「き」らめのよい」。

閏正月

正月のふたつありとや浮寝島

㊦ 自筆句集

㊦ 自筆句集、重出。前書「閏ありけるに」(後出句)。八番日記(4・

9)、上五「正月が」。浅黄空、前書「閏」、上五「正月が」。全集本発句

篇、希杖本に出とし、嘉永版発句集を見落す。

老婆洗衣画

○彼の桃もながれ来よく春霞

㊦ 杖の竹(文化13)

㊦ 七番日記(8・12)・稿本発句題叢・文政版発句集、上五「彼桃が」。

随斎筆紀、「彼桃が流来かよ」。全集本発句篇、この句の出典を「夕暮

や霞中より無常観」の注に誤入。

軽井沢

○笠でするさらばくやうす霞

㊦ 七番日記(14・2)・浅黄空・自筆句集

㊦ 七番日記、前書「軽井沢春色」。浅黄空・自筆句集、前書「軽井沢」。

○西山やおのれが乗るほどの霞

㊦ 七番日記(10・2)・志多良・句稿消息・文化十年三月十日付

双樹あて書簡

㊦ 双樹あて書簡、前書「生残りて物淋しき折から」。浅黄空、中七「お

れが乗のは」。自筆句集、中七「おれののるのは」。

茶鳴子のやたらに鳴や春がすみ

㊦ 句稿消息(文化11)

牡丹餅を喰はへて霞鳥かな

㊦ 嘉永版発句集初見

紅梅やうつとしかねば二本まで

㊦ 稿本発句題叢 発句鈔追加

㊦ 希杖本句集、上五「紅梅を」。全集本発句篇、「嘉永版」上五「梅が香や」と誤る。「一茶新集」所収発句鈔追加、中七「うつとしかねば」と「か」に濁点。

○梅の花爰を盗めとさす月か

㊦ 梅塵本八番日記(2)・おらが春

㊦ 風間本八番日記(2・1)、座五「さす月よ」。

○そら錠と人にはつげよ梅の花

㊦ 七番日記(1・7)・浅黄空・白筆句集

㊦ 浅黄空、前書「旅立」。

島原

○入口のあいそになびく柳かな

㊦ おらが春

㊦ 前書「京嶋原」

皮剥が腰かけ柳青みけり

㊦ 稿本発句題叢・発句鈔追加

螢飛夕をあてやさし柳

㊦ 稿本発句題叢(文政3)・近世発句類題集(文政3)

門柳天窓でわけて這入けり

㊦ 八番日記(2・2)

人声にもまれて青む柳かな

㊦ 八番日記(2・2)

○犬の子のふまえて眠る柳かな

㊦ 句稿消息

㊦ 七番日記(11・春)、中七「加へて寝たる」。

○けろりくわんとして烏と柳かな

㊦ 希杖本句集

㊦ 七番日記(8・1)、「雁と柳哉」。我春集、前書「九日夜探題」(五句中の第一句)、「雁と柳かな」。

善光寺堂前

白猫のやうな柳も御花かな

㊦ 八番日記(2・2)

㊦ おらが春、上五「灰猫の」。

御殿山

○鶯も親子づとめや梅の花

㊦ 文政句帳(5・1)・浅黄空

㊦ 自筆句集、上五「鶯の」。

三日月やふはりと梅に鶯が

㊦ 七番日記(8・1)・鳥のむつみ(文化11)

○鶯にあてがつておく垣根かな

㊦ 七番日記(10・2)・志多良・句稿消息・白筆句集

㊦ 浅黄空、座五「留守家哉」。

○鍬の柄に鶯なくや小梅むら

㊦ 七番日記(8・1)・我春集・稿本発句題叢

鶯の目利してなく我家かな

㊦ 八番日記(2・1)

㊦ 発句鈔追加、座五「屠家かな」「藁屋かな」。

餅組も一ざしきなりうめの花

㊤ 中七「一座敷あり」の誤記であろう。八番日記(3・6、4・11 重出)、自筆句集、中七「一座敷あり」。浅黄空、中七「一座有也」。

鳥の音に咲うともせず藪の梅

㊤ 嘉永版発句集初見

梅に月いやみからみはなかりけり

㊤ 上五・中七「梅の月いやみからみは」の誤記か。八番日記(2・6) 「梅の月いやみ辛〔み〕は」。自筆句集、「白梅にいやみからみは」。浅黄空、「白梅ニいやみからみハ」。全集本八番日記に、「辛〔み〕」とルビを付すが、自筆句集・浅黄空により「からみ」と読むべきであろう。

孤はげばはやあか〜と梅の花

㊤ 八番日記(2・3)

团十郎

咲たりな江戸生ぬきのうめの花

㊤ 株番(文化9)

梅折や天窓のまるい影法師

㊤ 八番日記(2・12)

㊤ 風間本、中七以下(天窓の丸へ影ほふし)。梅塵本、中七以下「天窓の丸い影法師」。

信濃言葉

赤いぞよあのものおれが梅の花

㊤ 七番日記(11・1)・句稿消息

㊤ 七番日記、前書なし。句稿消息、前書「信濃こと葉」。上五「鶯が」

を朱にてミセケチにし、上白に「赤いぞよ」と推敲。

相馬覽古

○梅が香や平親王の御月夜

㊤ 文政版発句集初見

㊤ 七番日記(8・1)、前書なし。上五「梅さくや」。我春集(文化8)、前書「相馬京旧懐」。上五「梅さくや」。

○梅さくや唐土の鳥も来ぬ先に

㊤ 句稿消息

㊤ 中七「唐土の鳥の」。

○月の梅「の」蒨蕪のとけふも過ぬ

㊤ 志多良・自筆句集・浅黄空

㊤ 志多良・自筆句集・浅黄空・文政版発句集、上五「月の梅の」。七番日記(10・2)、上五「月よ梅よ」。

○笠きるやうめの咲日を吉日と

㊤ 句稿消息・浅黄空・自筆句集

㊤ 句稿消息、前書「二月七日家を出る」。浅黄空、前書「旅立廿五日」。志多良、前書「三月十五日庵を出なんとして」、中七「桜さく日を」。山鶯よりもめずらしく新金を齒にあてけるを

○二歩判の初音出しけり梅の花

㊤ 八番日記(2・11)

㊤ 前書なし。

○下戸村やしんかんとしてうめの花

㊤ 七番日記(11・9)・句稿消息・浅黄空・自筆句集・文化十二年三月五日付斗圍あて書簡

㊦ 板本発句題叢(文政3)・発句鈔追加

㊧ 七番日記(9・1)・稿本発句題叢・希杖本句集、中七「是も門松」。

○小松引人とて人のおがむなり

㊨ 八番日記(4・11)・自筆句集

㊩ 八番日記(4・9)、中七「人として人が」。梅塵本(4)、中七以下

「人として人をながむかな」・「人として人のおがむなり」。

我庵やけさの年玉取に来る

㊪ 七番日記(11・1)・句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集・

発句鈔追加・近世発句類題集(文政3)

○初夢に猫も不二見る寝やう哉

㊫ 文政句帳(7・12、8・1)重出)

○逃しなや水祝るゝ五十掬

㊬ 七番日記(1・2)・浅黄空・自筆句集

㊭ 浅黄空・自筆句集、前書「水祝」。

大声や廿日過ての御万歳

㊮ 七番日記(8・1)・我春集・板本発句題叢・発句鈔追加

㊯ 稿本発句題叢、中七「廿日過て」。

○鳴猫に赤ン目をして手まりかな

㊰ 八番日記(4・1)・自筆句集

㊱ 文政版発句集、前書「小児のあどけなさを」。自筆句集、上五「鳴く

猫「に」」。八番日記(3・6)、中七「赤ン目と云」。

鶴の画に

人の曳小まつに千代やさみすらん

㊲ 中七、「小まつ、千代や」の誤記か。八番日記(3・10)・梅塵本八番

日記(3)・発句鈔追加、中七「小松の千代や」。前書はともに「鶴の
賛」。自筆句集、前書なし。中七「小松の千代や」。

脇差の柄にぶら／＼若菜かな

㊳ 文政句帳(8・1、8・3)重出)

㊴ 文政句帳(7・12)、中七「ブラ下ル」。浅黄空・自筆句集、中七「ぶ

ら下る」。自筆句集、前書「若菜」。

○垢爪や薺の前もはづかしき

㊵ 七番日記(10・1)・志多良・句稿消息・浅黄空・自筆句集

㊶ 七番日記・志多良・句稿消息・浅黄空、前書「人日」。

天神参

○ちさい子の麻上下や梅の花

㊷ 八番日記(2・12)

㊸ 前書「天神祭」。ただし、梅塵本八番日記、前書「天神参」。

○梅の木や欲にや願はぬ三日の月

㊹ 文政版発句集初見

㊺ 文政句帳(7・12)、「梅が枝や欲ニヤ希ヌ三ケの月」。文政句帳(8・

3)、上五「梅がゝや」、座五「三ケの月」。

○梅折や盗みまますると大声に

㊻ 中七「盗みまますぞ」の誤記であろう。文政句帳(7・6)、中七「盗

ミ「ま」すぞと」。同(8・3)・浅黄空・自筆句集・文政版発句集、

中七「盗みまますぞと」。

梅の木のあるかほもせぬ山家かな

㊼ 七番日記(12・12)の末尾に「寛政元年ヨリ文化六年迄」と注して収

めた二十八句中の一句)・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追

初空へさし出す獅子の天窓かな

㊦ 我春集・浅黄空・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集・

しきなみ(文化8)

㊦ 七番日記(8・1)、座五「首哉」。

草庵二句

庵の春寝そべる程は霞なり

㊦ 稿本発句題叢・希杖本句集

㊦ 発句鈔追加、座五「霞けり」。「草庵二句」は、撰者の記述。

我春も上々吉ぞうめの花

㊦ 随斎筆紀・稿本発句題叢・自筆句集・発句鈔追加

㊦ 自筆句集、前書「はつ春」。七番日記(8・1)、中七「上々吉よ」。

同(11・春)、中七以下「上々吉よけさの空」。自筆句帳、中七「上々吉よ」。

三崎の井は遊女柏木がかたみなりとかや

○若水のよしなき人に汲れけり

㊦ 文化句帳(5・1)

㊦ 前書「三崎野中の井は遊女柏木がかたみ也」。

若水やそうとつき込梅の花

㊦ 嘉永版発句集初見

○蓬萊や唯三文の御代の松

㊦ 七番日記(8・1)・浅黄空・自筆句集

蓬萊に南無くと言子供哉

㊦ 我春集・板本発句題叢(文政3)

㊦ おらが春・稿本発句題叢・浅黄空・自筆句集・発句鈔追加、中七以

下「南無く」といふ子哉」。七番日記(8・1)、座五「童哉」。

富士の画に

○初春や千代のためしに立給ふ

㊦ 文政版発句集初出。前書「富士画に」。

初春も月夜となりぬ人の皺

㊦ 嘉永版発句集初出。中七「月夜となるや」の誤記か。

㊦ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集・近世発句類題集、中七「月

夜になるや」。文化句帳(2・2)重出)、中七以下「月夜となるや顔の皺」。

長谷の山中に年籠りして

○我もけさ清僧の部なり梅の花

㊦ さらば笠・浅黄空・俳諧寺抄録・自筆句集

㊦ さらば笠、前書「此裡に春をむかへて」。浅黄空・俳諧寺抄録、前書「山寺に春を迎へて」。自筆本句集、前書「山寺に元日」。文政版発句集、前書「長谷の山中に年籠りして」。

○福わらや十ばかりなる供奴

㊦ 七番日記(11・1)

小児のあどけなきを

○かま獅子が腮ではらへぬ門の松

㊦ 文政版発句集初見

㊦ 前書なし。中七「腮ではらひぬ」。

○袴着て芝にごろりと子の日かな

㊦ 自筆句集

折てさすそれも門まつにて候

凡例

- 一 一行めに、嘉永版『俳諧一茶発句集』の本文をおく。ただし、漢字はおおむね現行文字とした。また、「もとの集」(文政版『一茶発句集』)にあるものは、句頭に○印を付した。
- 二 二行め以下に、㊸として、初出及び他書に所収の有無を書名等によって記した。
- 三 句形等に嘉永版発句集と異なるものがある場合、㊸以下にそれを示した。
- 四 嘉永版発句集の他は、主として一茶全集本により、必要に応じて一茶叢書本その他によった。例えば、『浅黄空』(叢書本)、『希杖本発句集』(萩原井泉水校訂『一茶遺稿・志多良』岩波書店)、『一茶発句鈔追加』(栗生純夫著『一茶新考』西沢書店)などがそれである。

一茶発句集

春の部

- 元日や上々さちの浅黄空
- ㊸ 浅黄空・俳諧寺抄録・自筆本句集・希杖本句集
- ㊸ 浅黄空・俳諧寺抄録、前書「元日」。嘉永版発句集以外、中七「上々吉の」。
- 元日も立のまんまの屑家かな
- ㊸ 浅黄空・自筆句集・俳諧寺抄録
- ㊸ 八番日記(文政4・10)・発句鈔追加、中七「立のまゝなる」。
- 春立と申もいかゞ上野山
- ㊸ 七番日記(文化7・1)
- 土蔵から筋違にさすはつ日かな

㊸ 八番日記(2・1)

㊸ 中七「すじかいにさす」。ただし、梅塵本、中七「筋違にさす」。

鶯のいな啼やうも今朝の春

㊸ 八番日記(2・12)

㊸ 中七「いな鳴やうも」。

あばら家の其身其まゝ明の春

㊸ 八番日記(2・12)

㊸ 上五「あばら家や」。

還歴

○春立や愚のうへにまた愚にかへる

㊸ 文政句帳(6・1)

㊸ 文政句帳、「菌原や、そのはらならぬはゝきに、住馴し伏家を掃き出されしは、十四の年にこそありしが(中略)、今迄にともかくも成るべき身を、ふしぎにことし六十一の春を迎へるとは、実にく盲亀の浮木に逢へるよろこびにまさりなん。されば無能無才も、なかく齡を延る葉になんありける。」の文にこの句を添える。

文政句帳(5・9)、中七「もとの愚が又」。自筆本句集、中七「愚の上を又」。

新家賀

○年立や雨おちのいしの凹むまで

㊸ 文政句帳(5・9)・浅黄空・俳諧寺抄録・自筆句集

あら玉の年立かへるしらみかな

㊸ 文化句帳(5・1)・稿本発句題叢・自筆句集・発句鈔追加・希杖本句集・近世発句類題集(文政3)

本文 上・三十丁、下二十五丁。柱刻は、上一・上二、下

二十四、下二十五。太野で囲み、各面十行。所収句

数八二二。他に俳諧歌一八。

撰者 下冊の裏表紙見返に、「今井彦右衛門輯」。

刊記 下冊の裏表紙見返に、撰者名に続けて、「嘉永元戊

申歳新鑄」「江戸書林 十軒店英大助・通子日山城屋佐

兵衛」「信州書林善光寺大門町蔦屋伴五郎」とある。

嘉永版『一茶発句集』成立のいきさつについては、一具の序に、

斯而文政丁亥の冬黄泉の客となりしのち、門徒集りて反古物し
らべしかど、斯く隠逸のさがにしあれば、いひのこす言葉もな
く、さるさうしやうのものさへちり／＼になんなりしを、からう
じて句集いできにたれど、それさへ蔵板とかいふものにて世にお
はやけならざるををしミ、書肆何某おのれにはかりて刪補を乞
ふ。辞する事にしもあらねば、もとの集の上に自他の耳底に残り、
すりまき、消息やうのたぐひに見えたるをも書くはへて……。

とあり、桜園の序には、

その集あまたなりしが、今ハよにちりほひてたはやすくうべく
もあらずなれるを、書林向栄堂、嗽芳庵墨芳とこゝにあなぐり、
かしこにもとめて、かく一部の集となしぬるハたれかハめでよろ

こはずしもあらん。

とあって、一致しない。一具の序は弘化四年（一八三七）、桜園の序
は天保十四年（一八四三）であり、上梓の前年に書かれた一具の序
を軽視することはできないが、奥付に「今井彦右衛門輯」「信州書
林善光寺大門町蔦屋伴五郎」とあり、「嗽芳庵墨芳」は善光寺大門町住
の今井彦右衛門（俳禅居）、「向栄堂」も善光寺大門町住の蔦屋（岩
下）伴五郎の書肆名であるから、桜園（善光寺大勸進侍・岩下平助、天
保十四年当時在江戸）の記述に従うのが妥当であろう。

文政十二年、一茶社中によって編まれたいわゆる文政版一茶発句
集が、「蔵板とかいふものにて世におはやけならざるををしミ」、
「書林向栄堂、嗽芳庵墨芳とこゝにあなぐり、かしこにもとめて、
かく一部の集となしぬる」というのが事実、もしくはそれに最も近
いと考えてよからう。それは、「もとの集の上に自他の耳底に残り、
すりまき、消息やうのたぐひに見えたるをも書くはへ」ることによ
って、「もとの集」に発句三百一句、俳諧歌三首を増補することに
なったのである。

注 全集本の解説に、「一茶自筆句稿に『嫉捨』と題するものがあり、
『一茶発句集』の巻頭の句から『相馬覽古』までと、『嫉捨など』は『
以下巻末までの部分はこの句稿と一致する。』とある。

〔研究ノート〕

嘉永版『俳諧一茶発句集』入集の句 (一)

黄色 瑞華

存在が確認されている。

このノートの底本(報告者架蔵)の書誌は次のとおりである。

書 型 小本。一六糎×一一・一糎。二冊。

表 紙 縹色布目。

綴 糸 紫絹糸一本掛。

題 簽 左肩。子持野で囲い「俳諧一茶発句集 上」「「俳諧一茶

内 題 發句集 下」とある。

表紙見返 一茶発句集(上・下)

序 子持野で囲み、三分して「嘉永戊申新鐫」「俳諧一茶

發句集」東都書林 山城屋佐兵衛」。

「弘化丁巳(注・弘化四年、「丁巳」は「丁未」の誤りで

あろう)俳沙弥一具(注・高橋一具)全二丁と、「天保

十四年みなづき」桜園主人(注・岩下桜園平助)

全二丁。ただし、柱刻は一具の序のみ「一具序 一

し二」。

一茶自撰の発句集に、『浅黄空』(久保田ひろ志氏蔵)、『一茶翁自筆

句集』(教授院蔵)がある。前者には、寛政五年から文政五年までの句

が収めてあるが、「春の部」のみで、所収句はわずかに五二九句に

すぎない。後者は、「春」「冬」の二冊に一〇四四(重出・抹消を含む)

を収め、所収句の成立年代も寛政五年から文政八年に及ぶが、「夏」

「秋」の二冊を欠き、所収句の大部分は文化九年以降の成立である。

ほかに、湯本希杖の『希杖本一茶句集』(荻原井泉水「一茶遺稿・志多

良」岩波書店、昭12)、天保四年の其一庵宋鶴(長沼経善寺住職)編「一

茶発句鈔追加』(栗生純夫「一茶新考」西沢書店、大15)もある。

一茶発句集の板本には、二系統、数種のものがある。二系統は、

いわゆる文政版一茶発句集・俳諧社中校正『一茶発句集』(文政十

二年丑七月、信州・俳諧寺門徒蔵板)と、いわゆる嘉永版一茶発句集・

嘉永戊申新鐫「俳諧一茶発句集」(今井彦右衛門輯、嘉永元戊申歲新鐫、

江戸 英大助・山城屋佐兵衛、信州 葛屋伴五郎)とである。前者には、

上下合本の「仏都 仁龍堂」があり、後者には、二つの序の一つを

跋としたもの、嘉永四年の刊記を有するもの、無刊記のものなどの